

学 科 名	学 類 名	年次
普通科	全体	2年

科目名 (校内科目名)		単位数	講座数	生徒数	種別	履修形態	指 導 者 名 (時間数)	
総合的な学習の時間 (GLOBAL II)		2	8	359	必修		2年次担当者24名(78)	
教科用図書 (発行所)				教科書以外の教材 (発行所)				
学 期	単 元 名	学習の ねらい	学習内容	配 当 時 間	観 点 別 学 習 到 達 目 標			
					関心・意欲 ・態度	思考・判断 ・表現	技能	知識・理解
	探究的学習 1 ― ①	異力の統合の意味を理解し、研究を進める	・個々の得意分野を生かした情報収集 ・それぞれの収集資料の共有化 ・探究の深化を図るための技能を身につける	10	英文のHPや英文書などに対しても意欲的に情報収集を行うことができる チームの中で、意欲的にディスカッションに参加することができる	数多くの情報から、正しい情報を選択することができる 他者の意見を冷静に聞き、新たな課題と解決への道筋を考察することができる	専門的な得意分野の情報をチームと共有するために、簡潔かつ論理的に説明することができる 得られた情報を整理し、効果的に表現することができる	調べた内容について、現状の把握をすることができる 調べた情報を的確に分析し、多角的な面から検証し、情報の信憑性をあきらかにすることができる
	探究的学習 2	他文化を持つ人々とのコミュニケーション能力を身につける 世界の中の一人として思考・行動する力を身につける	・クラスづくりやチーム作りとその実践 ・現在の世界情勢を意識させる	12	他者と自分の違いを理解し、互いの発展的な方向性を見いだす意欲を持つ 世界の出来事や課題に関心を持つ	高校生としての立場で、解決の糸口を見いだすことができる 世界的な課題に目を向け、世界の一員としてどのように関わっていくべきかを考察することができる	自分の立場だけでなく、相手の立場にも立ち、コミュニケーションを図ることができる 論理的にものごとを説明し、自らの意図を正確に相手に伝えることができる	互いの意見を持ちより、多くの可能性の中から、現状を理解する 現在の世界のありようを理解し、地球上に生きる共通の人間としての課題を認識する
	探究的学習 1 ― ②	研究の在り方を身につける より多くの人々に自分たちの研究を発信する基礎的技能を身に付ける	・研究内容の見直しをして、より深い考察を実践する ・その国に住む人々のアイデンティティを理解し、世界に発信する	56	新たな課題の発見と問題解決について高い次元の探究に向けて意欲的に取り組む 主体的に行動し、問題解決に取り組むことができる	今までの過程を見つめ直し、深化した研究に必要な思考をすることができる 日本と世界を意識し、互いの共生を考察することができる	今まで学習した内容の中から、有用な方法を使い、表現することができる 人に伝える技術の向上を図り、世界の人々にも研究の成果を伝える技能を身につける	知り得た情報から、的確にものごとを解決する手順を理解する 研究によって身につけた知識を単なる個人・チームの知識に終わらせることなく、多くの人々に伝達する方法を理解する

総 時 間 数

78

学 科 名	学 類 名	年 次
普 通 科	全 体	2 年

科 目 名 (校内科目名)		単位数	講座数	生徒数	種別	履 修 形態等	指導者名 (時間数)
総合的な学習の時間 (GLOBAL II)		2	8	359			2 年次担当者24名 (78)
教 科 用 図 書 (発 行 所)				教 科 書 以 外 の 教 材 (発 行 所)			
単元名 題材名	事 項 名 (教 材 名)	時 数	形 態	指 導 内 容		指導上の留意点、教材等	
探究的学習 1ー①	異力を統合した多面的な探究活動	4		・異力を統合するチーム作りとその実践		・異なる特徴を持つ学類の力を1つに統合していくことに主眼をおいたコミュニケーション力を育てる。	
	探究や発表の方法・内容についてより深く学び、探究型学習の応用的な技能を身につける	6		・GLOBAL I で修得した基礎的技術の実践とより深く探究する能力		・より深い探究を促す調べを行う中で、日本語以外の資料等の参考も促し探求をする。	
探求的学習2	学類研修に向けての探究活動	12		・学類、行き先別のチーム作りと研修先でのディスカッションを視野に入れた探究活動		・学類研修旅行先の大学や高校との交流でディスカッションの素材となるべき知識、コミュニケーション力を身につける。	
探究的学習 1ー②	探究や発表の方法・内容についてより深く学び、探究型学習の応用的な技能を身につける	25		・GLOBAL I で修得した基礎的技術の実践もとより深く探究する能力		・外部講師や企業、組織との連携を図り、課題の解決に向けて探究活動を行う。	
	研究の途中経過としての課題を検討し、解決の方向性と今後の研究の進め方について	15		・途中経過時点での研究の進捗度、方向性の再検討		・研究課題の再確認することで、計画立てた研究を実施する技能を身に付ける。	
	日本人としてのアイデンティティーと異文化に対する理解	10		・日本や地域の理解を深め、世界との相違点の認識と世界との協同を目指す力		・世界の中の日本を意識し、世界の共存を図るための思考力を身につける。	
	研究成果からの提案・実践・発信	6		・研究内容を伝える技能の育成		・GLOBAL I で培った表現力やコミュニケーション能力を実践する。	
	海外修学研修について			・海外への学びの発信より実践的なコミュニケーションを図る		・GLOBAL I の表現力をより高め、高度なディスカッション能力を身につける。	
時 数 計		78					
備 考							

2. 実施概要

(1) 「GLOBAL II」の展開

- ・「総合的な学習の時間」のうちの2単位を利用し、2年次の水曜日6・7限の2時間連続で実施する。
- ・次頁の通り、4つの研究分野と8つの大きな研究テーマを設定する。生徒はそこから興味・関心のある研究テーマを選択し、課題研究活動を行う。
- ・班の編成では異なる学類の生徒が同じ班になるように工夫し、各学類の特徴を生かして活動させる。
- ・2年次団教員全員、大学教員（研究テーマ毎に計8名）、TA（研究テーマ毎に計6名）、ET（2名）で指導にあたる。
- ・大学教員には、研究の立ち上げ、中間発表、最終発表の年3回、TAとETには毎時間参加してもらう。
- ・研究成果として、プレゼンテーションソフトでの発表をさせるとともに、A4判10頁以内の研究論文とA4判1頁の研究の概要（日本語と英語の両方）とを作成させる。

(2) 「GLOBAL II」の指導法と実施概要

生徒の主体的・積極的な研究活動を尊重することを中心に考え、教員はそれを支援する姿勢で指導にあたった。その際、生徒の研究活動の状況を常に把握し、方針や見通し等についての修正や助言を行い、TAやETと協力して生徒を深い課題研究活動へと導くことを念頭においた。

年度当初のオリエンテーションで「GLOBAL II」に取り組む意義について再確認した。また、SGH係から、テーマの説明や年間の活動計画を説明し、1年を通じての見通しをつけさせた。生徒には学年集会やホームルーム活動の中で折に触れて各教員が探究的な学習の重要性について語った。

生徒は希望する研究テーマにより、A～Hの8つのグループに分かれ、さらにグループの中で6名程度の班を編成した。1学期の間は具体的な研究テーマに絞ることに苦労した班が多く、岡山大学の先生に助力をいただきながらテーマを考えた。一度考えたテーマを何度か変更する班もあったが、このテーマ設定こそが課題研究に取り組む上で、大切な段階であり、批判的思考力を伸ばすチャンスと捉えて、時間をかけて指導を行った。

1学期の半分の時間は、学類研修での経験が課題研究の内容に結びつくように情報収集やプレゼンテーションの準備を行った。研修先が海外である生徒も多いので、異文化に接することによって日本や岡山の理解が深まる機会となることを意識させ、学類研修に臨む準備を行わせた。各学類研修先でしかできない貴重な経験を通し、コミュニケーション能力や知的好奇心を醸成し、学習意欲を喚起することができた。

2学期は集中的に課題研究に取り組むことができ、各班は図書室の書籍やインターネットを利用し、自分たちの仮説を証明するための調査を行い、考察を深めた。生徒や教員に対するアンケート調査以外にも、実験を行う班や地域社会と連携して調査・研究を進めようとする班が多く見られた。例として、

- ・「点字ブロックとの関わり方」研究班：盲学校で職員にインタビュー
- ・「ヤンキーから見たより良い生徒指導」研究班：岡山少年院で職員にインタビュー
- ・「海ごみの現状」研究班：水島地域環境再生財団を取材、海の清掃活動に参加
- ・「レジ袋削減」研究班：城東エコバックを作成し校内で販売
- ・「廃棄野菜の削減」研究班：廃棄野菜の粉末でクッキーやパンの作製 等々

それぞれのグループでの研究において、課題研究の中で生じた疑問を外部団体と協力したり、身近なことから解決しようと試みたりしていた。そこには、高校生らしい柔軟な発想と積極的に活動する意欲的な姿勢が見られた。

1月には、全ての班が研究成果をグループ内で発表し、その結果選ばれた計24の班が、1、2年次生全員が参加するSGH課題研究発表会（平成31年2月6日（水）実施）で代表として発表した。今年度は1年次生のポスターセッションと2年次生のプレゼンテーション発表の時間をそろえることで、それぞれの発表を見に行きやすくした。

3. 課題研究

(1) 研究テーマと大学などとの連携

研究領域	研究テーマ	内 容	連携先（岡山大学） 及び【担当教員】
経済・産業	[A] 地域経済の発展と課題 選択者37名（7班）	今日の日本は都市への人口集中、地方の過疎化などにより地域経済の衰退が進んでいる。そこで、地域の活性化を他国の事例を参考に考察し、日本での取組を提言する。	岡山大学大学院社会文化科学研究科教授 長畑 秀和先生 【勝間田・貫井】
	[B] 新しい産業の構築 選択者39名（6班）	グローバル化が進む中、以前には考えられなかった新しい産業が次々と誕生している。そうした状況を世界的に考察し、今後の日本で取り組むべき新しい産業を提言する。	岡山大学大学院社会文化科学研究科教授 尾関 学先生 【大山・武部・羽藤】
国際貢献	[C] 身近な国際貢献 選択者29名（5班）	今日の世界は、貧困・飢餓・紛争など様々な問題を抱えている。そこで世界の困難な状況を理解し、自分たち高校生でもできる国際貢献にはどのようなものがあるか提言する。	岡山大学グローバル・パートナーズ教員 稲森 岳央先生 TA:周 霞さん ET:小林 テレサ先生 【大下・ノリス】
	[D] 世界の中の日本 選択者57名（10班）	自分たちが住んでいる日本という国は、世界からどのように評価・認知されているのか。世界の中の日本を様々なデータから知り、そうした日本が世界の中でどのような国際貢献ができるのかを考察し、提言する。	岡山大学グローバル・パートナーズ講師 山本由美子先生 TA:岡本 彩花さん 【浦上・小郷・古市・森】
環境・安全	[E] 資源をめぐる世界 選択者39名（7班）	今日の世界は、有限の資源を消費することで成り立っている。そうした資源の世界的利用状況を調査し、今後の世界でどのようなエネルギー使用の在り方が必要かを考察し、持続可能なエネルギー使用を提言する。	岡山大学資源植物科学研究所教授 且原 真木先生 TA:大西 亜弥さん 【辻・西崎】
	[F] 安心・安全な社会とは 選択者57名（9班）	毎日の暮らしの安心・安全はどのように構築されているのか。日本での取組を他国と比較し、その問題点と改善点を考察し、より安心・安全な社会の構築を提言する。	岡山大学教育学研究科講師 大熊 正哲先生 TA:高畑 昌志さん 【國定・竹内・中村・藤村】
教育・文化	[G] 日本と世界の初等教育 選択者38名（7班）	日本の初等教育（小中学校）は、世界の取組と比べどのような類似点・相違点があるのか。教育先進国と呼ばれる国との比較から、変えるべき点、変えるべきでない点を提言する。	岡山大学教育学研究科准教授 平田 仁胤先生 TA:山岸 佳意さん ET:レイチェル アン先生 【大島・大野・森本】
	[H] 世界での日本文化 選択者61名（12班）	日本の文化は海外でどのように紹介されてきたのか。世界での評価を歴史的に考察し、日本文化とは何かを海外の視点から考察し、日本文化の新たな価値を提言する。	岡山大学大学院社会文化科学研究科教授 延味 能都先生 TA:テラ 穰二さん 【入口・亀井・杉岡・山下】

※TA…ティーチングアシスタント、ET:イングリッシュティーチャー

(2) 活動の経過

① オリエンテーション(4月11日)

2年次生全員を対象に、SGH主任がSGHに取り組む意義について説明を行った後、係が年間の大まかな流れと8つの課題研究テーマについての説明および研究の進め方についてオリエンテーションを行った。生徒は自分の所属する学類に関わらず、各自の関心・興味によってテーマを選択した。

② 各テーマ毎に大学教員の講義(5月16日)

8つの大きな研究テーマ毎にA～Hのグループに分かれ、岡山大学の教員の講義を受けた。各テーマの現状について専門的な立場からの説明と、研究についての具体的な取り組み方や到達点などについて学習した。その後、グループの中で班毎に考えていた具体的な研究テーマについて指導・助言を受けた。CとGのグループにはイングリッシュティーチャーが毎時間付き添い英語を用いた研究についての指導した。

③ 課題研究の本格実施(5月30日～)

昨年度の「GLOBAL I」A・B群で学んだことも活かしながらリサーチクエストを設定し、班員同士で意見交換しながらテーマを絞っていった。並行して6、7月に実施する学類研修の準備を含めた探究活動も実施したので、時間的には厳しい期間であったが、1年間を見通して計画的に研究を進めていくことの大切さを学ぶ時期となった。

④ 中間発表(10月3日)

グループ毎に、全ての班が課題研究の進捗状況と今後の見通しについて発表し、参加した岡山大学教員から助言・指導を受けた。自分たちで具体的な研究テーマを設定したものの、本当にそのテーマで研究を続けていけるのか、またどのように研究を完成させるかなど、研究が進むがゆえの不安を抱えていた班にとって、有意義な機会となった。同時に、他の班の発表を聞くことで、自分たちの未熟さや計画の甘さに気づくなど良い刺激になった。また、生徒同士の質疑応答を行うなど、今後の研究を深化させる上で大切な時間になった。

⑤ 課題研究の深化(10月17日～1月9日)

中間発表を終え、方向性や到達目標を見出した各班の取組が、以前にもまして積極的になってきた時期である。生徒や外部団体に対するアンケートの実施、フィールドワーク、電話やメールを利用した専門家への質問、校内でのキャンペーンや実験など、工夫した取組が見られた。

⑥ 発表会(1月16日～2月6日)

1月16日に全ての班がグループ内で1年間の研究成果の発表を行い、2月6日のSGH課題研究発表会の代表となる班が選出された。12月の時点では期限内の完成が危ぶまれた班も、休日や放課後等の時間を活用し、当日には工夫を凝らしたプレゼンテーションを行った。発表後の質疑応答では鋭い質問も飛び交い、発表者は質問に対応する経験を通して、多くの気づきを得た。大学の先生からは各班ごとに講評をいただき、今までの研究の成果を実感すると同時に、今後の課題を明確にした。

⑦ 作成物の完成

研究成果として、全ての班が「発表用スライドデータ」、「A4判10枚以内の研究論文」、「A4判1枚の研究の概要(日本語)」、「A4判1枚の研究の概要(英語)」を完成させた。

(3)「GLOBAL II」 8つのテーマと班毎の研究テーマタイトル

テーマ	班	設定した具体的なテーマ・目的
[A] 地域経済 の発展と 課題	1班	岡山の愛宕梨の発展による農業従事者の増加と地域活性化
	2班	商店街と学童保育
	3班	聖地巡礼で地域活性化するために
	4班	果樹栽培の六次産業化 ～岡山市中区沢田地区の柿農家の事例～
	5班	イベントを活用した地域活性化
	6班	ふるさと納税による地域格差をなくすために
	7班	婚活パーティーによる過疎対策への提言
[B] 新しい産 業の構築	1班	はいきた！はいきやさい
	2班	メタン発酵の利用とメタン発酵の消化液の利用の普及
	3班	土を使わない農業
	4班	AIを使ったコミュニケーションサービス
	5班	新しいジーンズの企画
	6班	レッドグローブを岡山の名産にするために
[C] 身近な 国際貢献	1班	The negative effects of plastic bags on the environment and possible solutions for a cleaner and more sustainable future
	2班	Stop "Human trafficking"!
	3班	Fire Ants
	4班	Let's Learn About Delicious Food in Okayama
	5班	The World's Garbage Problem
[D] 世界の 中の日本	1班	汚れた水をきれいに
	2班	点字ブロックとの関わり方
	3班	異世代ホームシェアについて
	4班	おもてなしの心
	5班	食料廃棄の現状と取り組み
	6班	新しいピクトグラムの提案
	7班	日本の投票率を上げるために
	8班	美作市に移住者を増やす取り組み
	9班	和食の継承
	10班	外国人観光客の安全のために
[E] 資源をめ ぐる世界	1班	農業が世界を救う
	2班	バイオマス発電の将来性
	3班	未来へのかけはし ～人工光合成～
	4班	海ごみの現状
	5班	小水力発電の未来
	6班	木くず
	7班	電気自動車はエコじゃない!?
[F] 安心・安 全な社会 とは	1班	カーブミラーの現状と改善
	2班	城東生の自転車の並列に対する有効策
	3班	岡山城東高校がバリアフリースクールになるには？
	4班	防災意識を高めるには
	5班	人口減少社会の治安維持におけるコンパクトシティの有効性に関する考察
	6班	青色防犯灯の有効性についての考察
	7班	高齢者の社会問題を解決するためには
	8班	渋谷ハロウィンのゴミ問題を解決するには
	9班	認知症緩和の対策案

テーマ	班	設定した具体的なテーマ・目的
[G] 世界の初 等教育	1班	The Diversity of Food and School Lunch
	2班	セクシュアルマイノリティのための学校改革
	3班	The suggestion of moral education for global society
	4班	居場所としてのスクールライブラリースペース ～万人を迎え入れ、静かに放っておいてくれる場所～
	5班	Revolution of Education - with new technology -
	6班	WHAT IS A BETTER GUIDANCE FOR ヤンキー
	7班	Current status and issues of Japanese club activity
[H] 世界での 日本文化	1班	わびさびを海外に発信する
	2班	世界と文化
	3班	伝統の継承
	4班	むかし！ばなし！だいすき！ ～教訓としての昔話の活用～
	5班	日本の城と西洋の城の違いから見える日本建築の魅力
	6班	授業をよくするための提案
	7班	皇室と若者
	8班	今のピクトグラムはわかりやすいか
	9班	新しい制服のカタチ
	10班	目指せ！ホワイト残業！
	11班	日本の部活動事情 JAPAN VS GERMANY
	12班	MORE COOL JAPAN

(4) 今年度の活動についての考察と今後の課題

同じテーマで研究をしたことと、先輩方の「GLOBAL II」の取組を参考にしたこと、スムーズに研究をはじめることができた。「異力の統合」をねらいに異なる学類の生徒で編成された班では、初めのうちはお互い遠慮があったが、研究が進んでいくうちにそれぞれが自分の意見を出せるようになった。最終発表の時にはグループ内での役割分担もできあがり、それぞれの班で協力して工夫を凝らしたプレゼンテーション発表ができ、概ね、ねらいは達成されていると感じた。

今年度も情報収集の手段として、インターネットだけではなく情報元となる書籍にあたること、フィールドワークを積極的に行って実際に見聞きし体験することを呼びかけた。年度の最初は図書館でテーマに関する本を数冊借りる生徒も多くいた。統計や市町村のHPなどはインターネットで調べ、意見を構築するための参考としては書籍にあたるなどの使い分けができていたようである。フィールドワークに関しては、夏休みや放課後等を利用して、外部団体・施設等を訪れアンケートやインタビューを実施したり、地域の活動に参加したりと、多くの班が校外に出向き活動した。

また、具体的な年間の予定と年度末に作成すべき成果物等を年度当初に周知し、計画的に取り組むよう促したが、前半はテーマの設定や調査方法を試行錯誤する中で時間が過ぎていき、中間発表が終わってから後半にかけてやっと自分たちで動けるようになったが、全体的に時間不足で十分な検証ができないまま結論や提案に至っている班も少なくない。

SGHの事業としては今年度が最終年度になるが、現行の「GLOBAL II」は現1年次生が2年次になって実施するものが最後となる。従って、来年度の実施にあたっては今年度の反省を活かし、早めのテーマ設定を行い、研究手法を夏休み前に決め、夏休みにフィールドワークを実施し、後半でじっくりと検証や考察に取り組むことが望ましいと考える。

生徒が課題研究を通して、身近な問題を自分たちの力で解決していくことができる、自分たちが行動することで社会や世界を変えていくことができると、その可能性を少しでも感じてくれたなら、それは「GLOBAL II」の大きな成果といえるだろう。

第3節 「GLOBALⅢ」の実施

1. シラバス・年間指導計画の作成と共有

(1) 「GLOBALⅢ」の基本的方針

「GLOBALⅢ」は、「GLOBALⅠ」や「GLOBALⅡ」とは異なり、希望する生徒が選択する科目（学校設定科目）であり、個人で研究する。これまでの学習成果を活かし、1・2年次での研究を深化させ、その成果を発信する活動にも力を入れる。指導する教員は、生徒が自主的・積極的に研究活動を実施できる場を提供するだけでなく、研究が深まるような助言を与える。外部機関との連携や、外部人材の活用も積極的に進める。

平成30年度は、国語、数学、外国語、理科、地歴・公民、保健体育の6教科の担当各1名と、副校長の計7名によるスタッフで「GLOBALⅢ」の運営にあたった。また、前年度に引き続き岡山大学グローバルディスカバリープログラムの協力を得、5月と8月には岡山大学で、11月にはメールのやりとりで生徒を指導していただいた。

(2) 「GLOBALⅢ」の方向性

「GLOBALⅢ」では、「課題研究の深化」、「研究成果の発信」および「GLOBALの集約」という3つの大枠の中で、幅広い活動が可能となるよう計画している。

① 「課題研究の深化」の活動例

書籍による調査や校外でのフィールドワークあるいはインタビューを通じて、データの信頼性を上げ、研究の充実をはかる。校内でのシミュレーション等を通じて、観察や実験の手法をデザインして、研究成果の分析や考察に客観性を持たせる。校内外の学習会・研修会等へ参加し、そこで得られる人脈を大切にし、有識者・専門家からの助言を得て、研究方法や考察を深める。

② 「研究成果の発信」の活動例

ICT機器を活用し研究成果を発表資料や論文にまとめ、校外のコンクールやコンテストに応募する。また、校内外で開催される発表会等への参加を計画する。研究発表に伴う質疑応答を経験することによって、プレゼンテーションの力のみならず研究の内容が高まることが期待できる。

③ 「GLOBALの集約」の活動例

「GLOBALⅠ」・「GLOBALⅡ」・「GLOBALⅢ」と継続して学習した体験をレポートにまとめる。必要に応じてポスターやエッセイに仕上げ、グローバル人材育成に重点を置く国内の大学や海外の大学への進学に利用する。後輩の課題研究に対して、経験者の立場からアドバイスをを行う。

2単位の授業のうち、1単位分は放課後や休業日に実施したことで、本校図書室に加え校外の図書館や専門機関での調査、必要な場所に出向いてのインタビューやフィールドワークが活発に行われた。NPO団体が主催するグローバル関連の学習会に定期的に参加し、広い視野を身につけ、積極的に活動した生徒もいた。

(3) 教員間の方針の共有

指導内容や指導方法について関係する教員間で連絡をとりながらも、今年度の選択者の実情に応じた柔軟な対応を心がけながら授業を行った。5人の生徒を3つのグループに分け、それぞれを2～3人の教員で担当した。毎回の授業では最初に全体的な相談や連絡をし、その後各グループに分かれて研究を進めた。生徒によって研究テーマや方法は様々であるが、発表会やコンテストへの参加、成果物の作成などは同じように行った。

研究成果の発表経験が成長を促す良い機会になると考え、7月の中間発表や11月の最終発表が大きなステップになるように配慮した。授業担当者以外の教員にも参加してもらい、発表に対するアドバイスをもらうことが生徒たちには貴重な経験となった。同じ理由で、校外での発表機会があれば積極的に紹介し、可能な限り生徒を派遣した。7月と12月のSGH運営指導委員会では外部の有識者の前での発表も実施した。

学 科 名	学 類 名	年次
普通科	全学類	3 年次

科目名（校内科目名）		単位数	講座数	生徒数	種別	履修形態	指導者（時間数）
GLOBALⅢ (GLOBALⅢ)		2	1	5	選択		7 名 (78)
教科用図書（発行所）			教科書以外の教材（発行所）				
単 元 名	学習の ねらい	学習内容	時 間	観 点 別 学 習 到 達 目 標			
				関心・意欲 ・態度	思考・判断 ・表現	技能	知識・理解
課題研究の深化	「GLOBALⅡ」で収集した情報に対して、更なる分析・考察を加えることにより課題研究を深化させる	・先行研究の調査 ・校外でのフィールドワーク ・校内でのシミュレーション ・教科・科目の自主的学習	26	関連の深い先行研究を調査し、研究内容を充実させるフィールドワークやシミュレーションを行い、普遍性や客観性を加味しながら分析・考察を加えることができる	収集したデータおよびその分析・考察の結果を取捨選択し、論点がクローズアップされるようにまとめることができる	データに普遍性や客観性が増したことを示すことができる	研究に関連する分野や学問領域の知識の習得につとめ、理解を深めることにより、課題の本質を掘り下げることができる
研究成果の発信	国内や国外で開催されるコンテストや発表会を利用して、研究成果を発信する	・発表資料の作成 ・国内の発表会やコンテストへの参加 ・インターネットを利用した海外への発信	26	学習会や発表会およびコンテストについて自ら調査し、積極的に応募することができる	選択と集中により、メリハリのきいたプレゼンテーションによってアピールすることができる	ICT機器を使いこなし、多くのプレゼンテーション法から最適なものを選ぶことができる 英語で発表する際は、英語の質疑に回答することができる	発表に際しての質疑応答において、相手の質問を理解し、的確に回答することができる
「GLOBAL」の集約	「GLOBAL」での学びを、レポートやポスターおよびエッセイなどにまとめ、必要に応じて利用する	・「GLOBAL」での学びを伝えるレポート ・海外への進学や留学の模索 ・2年次生の研究へのアドバイス	26	後輩が参考にできるように、3年間の「GLOBAL」での学びが自分に果たした役割をまとめることができる	課題研究を行い、自分の考えをまとめて発表する活動を通じて、思考力・判断力が高まっていることに気づく	必要に応じて自己推薦書や英語エッセイにまとめ、国内および国外の大学進学に役立てることができる	課題研究により身につけた知識は、通常の授業によるものよりも深い理解をもたらしていることに気づく
総 時 間 数		78					

教科名		科目名		単位数	科・類型	年次	講座数
GLOBAL		GLOBALⅢ		2	普通科	3 年次	1
単元名 題材名	事 項 名 (教材名)	時 数	形 態	指 導 内 容		指導上の留意点、教材等	
課 題 研 究 の 深 化	先行研究の調査	26	個 人 研 究	・普遍性や独自性を確認する		・データの信頼性を上げ、研究の充実をはかる	
	校外でのフィールドワーク			・実地調査により、一次情報を入手する		・研究結果の分析や考察に客観性をもたせる	
	校内でのシミュレーション			・観察や実験をデザインし、再現性のあるデータを得る		・行政や大学等の教育機関で企画される学習会に参加する	
	教科・科目の自主的学習			・関連する教科・科目の学力を極める		・学際的な領域についても理解を深める ・活動を通じて得られる人脈を大切にする	
研 究 成 果 の 発 信	非凡な発表資料の作成	26	個 人 研 究	・ ICT機器を利用して、効果的な発表資料にまとめる		・表計算ソフトやプレゼンテーションソフトを使いこなす	
	国内の発表会やコンテストへの参加			・大学や学会で開催される発表会への参加を計画する。 ・研究成果を論文にまとめ、コンテストに応募する		・研究発表に伴う質疑応答を経験し、研究の質を高める ・海外での発表に繋がるコンテストなども視野に入れる	
	インターネットを利用した海外への発信			・英語による発表資料を作り、海外の交流校等に発信する		・海外での研修経験を利用する	
「GLOBAL」の集約	GLOBALでの学びを伝えるレポート	26	個 人 研 究	・「GLOBALⅠ・Ⅱ・Ⅲ」を通して学んだ体験を、レポートにまとめる		・必要に応じて、ポスターやエッセイに仕上げ利用する	
	海外への進学や留学の模索			・海外の大学への進学や、国内の大学に進学後の留学を視野に入れた活動を行う		・海外文化体験研修や学類研修および海外修学研修などで得た人脈も活用する	
	2 年次生の研究へのアドバイス			・後輩の課題研究に対して、経験者の立場からアドバイスをを行う		・研究の過程で体験した困難とその克服について紹介する	
	時数計	78					
備考	時程内で 1 単位、時程外で 1 単位の授業を実施する						

2. 実施概要

「GLOBAL I・II」とは異なり、「GLOBAL III」は選択した3年次の生徒が個人で行う課題研究である。今年度は男子3名女子2名の計5名が、1・2年次での研究をさらに深化、発展させたいという考えのもとに選択した。

(1) 「GLOBAL III」での取り組み

- ・選択者は、1・2年次のSGHの取り組みを深化、発展させた研究を個人で行う。
- ・研究成果をもとに、プレゼンテーション用スライドと発表原稿、英文の研究概要、3年間の自分の課題研究をまとめたエッセイの3種類を作成する。
- ・研究成果を校内で発表する。また、校外の発表会への参加を企画する。
- ・国内外の大学への進学や留学を視野に入れた研究成果を目指す(AO、推薦入試などでの活用を想定)。
- ・校外の論文コンテストに応募する。

(2) 「GLOBAL III」の実施概要

選択生徒5名を教員7名で担当する体制で授業を行った。少しでも早く研究に入れるように、春休みの間に自分の研究テーマを考えそれに関する書籍を2冊は読んで4月を迎えた。最初の授業でお互いに自分のテーマに関して説明をしたが、いずれも意気込みは素晴らしく、中にはすでに予備的なフィールドワークを行った生徒もいるなど、順調にスタートを切った。

週1時間は通常の授業時間内で実施し、主に生徒から担当教員に研究の進捗状況の報告をし、担当教員がそれに対して質問や指導を行い、次週までの取り組みについての打ち合わせを行った。もう1時間は放課後や休業日を利用し、文献調査やフィールドワーク、あるいは実験などに取り組んだ。

順調なスタートを切ったかと思われた生徒も、研究が進む中でどのようにデータを集めれば良いのか分からず、行き詰まることが何度もあった。そうした中でも、生徒たちはGLOBAL IやIIの経験を活かして、実に積極的に活動した。今年度も岡山大学グローバル・ディスカバリー・プログラムの協力を得ることができ、5月には大学の文化人類学の授業に参加させてもらい、生徒たちには大きな刺激となった。7月には県外の高校で行われた英語によるSGH課題研究発表会に代表生徒が参加し、発表とシンポジウムを経験した。

7月下旬にメンバー内で中間発表会を実施した。そのために無理矢理にでも形を整える必要があったが、そこまでの研究をまとめることと、それ以降にすべきことを精選する良い機会となった。夏休みには再び岡山大学を訪れ、2人の大学教員から各人の研究について専門家ならではのアドバイスをいただくことができた。また、校外の論文コンテストに全員が応募し、表彰された生徒もいる。

8月以降は、それぞれの生徒が自分の研究を深めるために種々の工夫を加えた時期である。県立図書館や大学あるいは市役所への訪問、外国籍生徒やその保護者からの聞き取り調査、NPO団体の学習会への参加、電話やメールでの問合せ、空港や後楽園を訪れて外国人観光客へのインタビュー、友人の協力を得ての心理実験、多くの時間を費やしての理科実験、ツイッターに寄せられた投稿を収集しての分析、テーマに関連する講演会への参加等、積極的に活動した生徒が多い。限られた時間の中での授業であったが、予想をはるかに上回る時間をかけて、フィールドワークや図書館での調査をした生徒たちには頭が下がる。11月には県教委主催の校外での発表会に参加した生徒もいるが、発表の中に参加者との会話を取り入れるなどの工夫が見られた。

研究の成果をまとめた最終発表を11月下旬に行ったが、2日前のリハーサルでの反省やメンバーからもらった意見を活かした修正もなされ、3年目らしい立派な内容の発表であった。来年度「GLOBAL III」を選択する予定の2年次生や多くの教員が参加してくれたのはありがたかった。3学期には本校の課題研究発表会だけでなく他のSGH指定校の発表会にも参加し、発表や意見交換をする予定である。

3. 課題研究

(1) 選択者5名の研究概要

	研究タイトル	研究概要
1	多文化共生のまちを目指して ～高校生世代からみた解決策～	私が住む総社市では多文化共生を目標とした様々な取り組みを行っているが、問題点も存在する。中でも、言葉の壁とコミュニケーションの壁に注目し、「子ども世代の外国人移住者に対する受け入れ問題」の解決を目指した。書籍やwebページをはじめ、市役所担当職員と外国人へのインタビューを取り入れて研究を進めた。自分とは異なる人と出会った時、負の感情が生まれることを防ぐために、【学びの場の提供】【ディスカッションの実施】【掲示板の作成】【Instagramの活用】【外国人教員によるチューター制度の導入】の5つを提案する。
2	Okayama, a Popular Town-to-be	「岡山県にやってくる外国人観光客を増やすために何ができるのか」というテーマで研究を始めた。①英国と日本の空港等でのアンケート調査、②岡山後楽園でのインタビュー調査、③紹介ブログ開設(okayamatravelme.wordpress.com)とコメント要請、④文献調査、の手法で研究を進めた。外国人の目線に立って考えることで、「世界の中のOkayama」という見方をできるようになった。大都市を目指すよりも、ありのままの岡山を活かして楽しんでもらうべきだという、研究前とは真反対の意見を持つようになった。自分ならではの岡山のおすすめを持つことも必要である。
3	日本の #Me Too 運動	2017年、欧米では女性の地位を上げ男女が平等に生活できる社会を作るための#Me Too運動が広まったが、日本ではそれほど広まらなかった。ツイッター上の#Me Tooや個人のサイト、掲示板に寄せられた批判的コメントを集め、その原因を探った。コメントを①反男性論、②認知のゆがみ論、③単純化論、④私欲論、⑤無根拠論、に分類し考察を加えた。根本的な原因の一つにミソジニー（女性蔑視）があると考えられるが、それを払拭するには、まずは男女差別が存在していると理解することが必要である。
4	イシクラゲによる 土壌塩害の緩和は可能か ～NaCl 吸収能力の検証～	世界でも日本でも灌漑地や干拓地の塩害は深刻な問題であり、現在、植物や微生物に汚染物質を吸収させて浄化するファイトレメディエーションや耐塩性作物を栽培する方法で塩害対策が行われている。今回はイシクラゲで塩分を吸収できるのではないかと考えた。実験テーマはイシクラゲの塩分吸収の検証である。2種類の実験を通じて、イシクラゲは塩分を吸収していることが示唆された。塩害の緩和にイシクラゲを利用できる可能性があることがわかった。
5	人はいつ『ひらめく』のか？ ～創造性が発揮されやすい状況の分析～	AIと人間がうまく共存するために、人間の創造性（ひらめきによる創造に限定）が今後より重要になると予想される。アンケートやインタビュー、実験、著書などによってデータを収集し、創造性が発揮されやすい状況を分析した。ひらめく内容の価値の差異に関係なく、個人状態の場合は副交感神経が優位に働くときがひらめきやすく、集団状態ではコミュニケーションを円滑に進められる環境にあることが重要だと考えられる。個人の場合と集団の場合を単純に比較した場合、ひらめきにたどりつくのが早いのは、集団の時である。

(2) 論文コンテストについて

応募先	応募者数
国際医療福祉大学 第9回「共に生きる社会」めざして 高校生作文コンテスト	1名
NPO 法人こくさいこどもフォーラム岡山 高校生懸賞論文 2018 「SDGs と私」～17の持続可能な開発目標～	1名
全国英語教育研究団体連合会 第57回全国高校生英作文コンテスト「A Society I Want to Be Realized」	1名
読売新聞社 第62回日本学生科学賞	1名
第17回神奈川大学 全国高校生理科・科学論文大賞	1名

※全国高校生英作文コンテスト「A Society I Want to Be Realized」に応募した生徒が入選に選ばれた。

(3) 活動の経過

① テーマ選択と課題研究（4～6月）

研究がスムーズに始められるように春休み中にテーマを考えるように前もって指示をし、それについて発表させることから授業が始まった。選択生徒5名を3グループに分け、それぞれを教員2～3名が担当する形で進めた。春休みの間に既にフィールドワークをするなど、意欲十分に研究を始めた生徒たちであったが、具体的にどのような方法で研究を進めるかを考える段階になると、迷ったり悩んだりすることが多くなった。GLOBALⅢは2単位の授業であるが、1時間は金曜日3限に実施し、もう1時間は各自が放課後や長期休業中にフィールドワークや図書館での活動という形で実施した。昨年に引き続き、5月下旬には岡山大学文学部の文化人類学の授業に参加させてもらえることができ、大学生や大学教員のアドバイスを受けることができた。



岡山大学の授業に参加

② 中間発表（7月30日）

プレゼンテーションソフトを使っての中間発表を夏休み前に行った。事前に行ったリハーサルの後、自分で気づいたことや生徒同士でお互いに指摘し合ったことを改善しての発表であった。発表会では参加した教員から出された質問への受け答えの経験もできた。ここまでに自分が取り組んできたことを整理し、発表会で指摘された内容を踏まえ、夏休み中の活動に活かすことを目的とした発表会であったが、その目的は十分達成されたといえる。

③ 長期休業中の課題研究（7～8月）

岡山大学グローバル・ディスカバリー・プログラムの先生2名からアドバイスをもらう機会を得た。中間発表の資料を前もって送っておき、8月に生徒が大学を訪れ、一人ひとりに対して具体的な質問や提案をもらうことができた。それも意識しながら夏休みを利用して、資料収集や校外の専門機関への問い合わせ、行政機関や観光地でのフィールドワークなど、長期休業中ならではの時間をかけた課題研究を行った。また、理系の研究をする生徒は、実験観察に時間をかけることができた。前述の通り、全員がこの時期を中心に校外の論文コンテストに応募した。

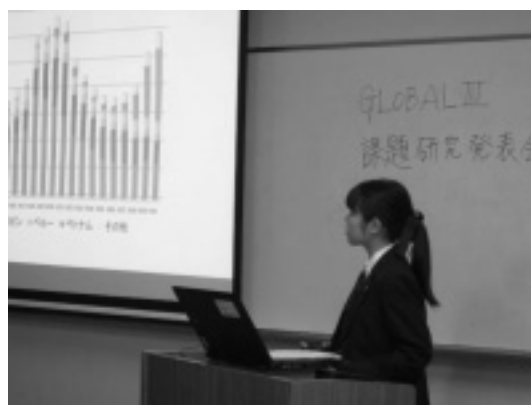
④ 研究の深化と発表の経験（9月～11月を中心に）

11月末の締め切りを意識しながら、研究を深化させるために資料収集や考察が本格的になった時期である。講演会や民間の研究会に参加した生徒もいる。7月には徳島県立城東高校で行われた中四国SGH高校生研究発表会で英語による発表、11月下旬には岡山県教育委員会主催のキャリア教育フェアで発表の機会を得た。また、7月と12月には本校SGH運営指導委員会で大学教授をはじめとする有識者の前で研究発表を行った。

この時期は大学のAO入試や推薦入試の時期と重なり、該当する生徒には時間的にも精神的にも厳しいものがあつたが、スケジュールを考えながら上手に対応してくれたと考えている。

⑤ 最終発表会（11月28日）

課題研究の集大成として、プレゼンテーション用スライドと発表原稿を完成させて、最終発表を迎えた。参加者からの質問に答える経験も含め、プレゼンテーションの力が高まったと確信できた発表会であった。事前に、メールのやりとりの形で8月にお世話になった岡山大学の先生2名から再びアドバイスをいただいたが、専門家ならではの視点からのアドバイスが多く、多角的に考えるよい機会となった。授業終了後の生徒の感想は、「高校生だからできる、逆に



最終発表会

今しかできない研究、学び、経験を得ることができ、本当に良かった。」「GLOBAL IIIで多少は自分で判断する力がついたと思うので、それをこれからの生活の中でいかす。」「自分が知りたいことを自分でデータや資料を集めて調べ、オリジナルの答えを出すことができた GLOBAL IIIの1年間の研究は大切な財産になった。主体的な学びによって大きく成長することができた。」「1、2年生の時とは異なる分野だったので、新しい研究の進め方を身につけることができた。」「計画通りに事が動いたことは一回もなかった。だから、何よりも大切なのは、まずはアクションを起こしてみること。そうすることで、現状の自分の立ち位置が見えてくる。イメージと現実のギャップを埋めていくことができる。そうやって自分にできることを把握することが、研究でも勉強やその他のことでも大切なことを学んだ。」などである。

⑥ 研究成果のまとめ

最終発表会で使用したプレゼンテーション用スライドと発表原稿に加えて、A4判1ページの英文での概要と、GLOBAL IIIの研究成果に3年間の活動の振り返りを含めたエッセイを作成した。また、3学期には校内での課題研究発表会をはじめ校外のSGH指定校で開かれる発表会等に参加した。

（4）今年度の活動についての考察

生徒の自主的で積極的な活動を期待し、研究方法について教員から細かい指示をすることはできるだけ避けたが、生徒たちは GLOBAL I、GLOBAL IIでの経験を活かしながら独自のものも取り入れて研究や発表を行った。当然のことではあるが、過去の経験が次の段階での力に繋がっていることを実感した。その意味でも GLOBAL IIIの経験は生徒たちの今後の活動に繋がると言え、授業に対する生徒の感想も高評価であった。

今年度の取組で、計画的に取り組ませることの大切さと、経験が生徒を成長させる大きな機会となることがわかった。長期的なスケジュールを示しながら期限を区切った小さなステップを踏ませたので、一時期に過度の負担となるのは防ぐことができた。

第4節 ホームページの運営

1. SGH 事業に関わる本校ホームページ運営の目的

- (1) 本校のホームページは、本校の魅力や特色を伝える広報活動の一つとして、SGH の取組や学校行事、4つの学類など、本校の学びの特色や校風が伝わる内容に焦点を当てながら情報を発信し、広い地域の中学生・保護者・一般の方々に本校の教育活動に対する理解を深めていただくことを目的とする。
特に SGH 事業の目的と概要、実際の生徒の取組などをまとめたページをつくることにより、本校の SGH 事業をよりわかりやすく紹介する。
- (2) 課題研究「GLOBALⅠ、Ⅱ、Ⅲ」の授業や、海外修学研修での本校生徒の生き生きとした様子や活動の成果を、本校保護者をはじめ一般の方々に伝え、報告の場とする。
- (3) 本校 SGH 事業の取組に関する海外交流校への情報や、イギリスでの海外修学研修の様子についてのタイムリーな報告を見やすい形で発信する。

2. SGH 事業に関わる本校ホームページの概要

(1) 本校ホームページの運営

- ① 平成 27 年 4 月、岡山県が管理する県立学校 Web 更新システム (WordPress) を用いた「新ホームページ」に刷新し、ホームページ内に SGH ページを開設した。
- ② 本校の教育活動を、中学生・保護者をはじめ多くの方々に理解していただくためにホームページを開設しており、その趣旨から総務課が管理・運営している。
- ③ 毎年春、全校生徒対象で実施する「城東高校が管理するウェブサイト・印刷物などへの画像掲載」の調査に基づき、個人情報保護に留意して管理・運営している。

(2) SGH ページの特長

- ① (a) 本校 SGH 事業の目的と構想・概要、(b) SGH 事業に関するブログ記事のうち新着記事 5 件の写真とタイトル・概要説明、(c) SGH 事業に関するブログ記事全てへのリンクボタンなどから構成されている。
- ② 多くの方がアクセスしやすくなるよう、特に SGH ページに関しては、2 種類のアイコンをトップページに表示している。
- ③ SGH ページには全国「SGH 専用ホームページ」へのリンクボタンがあり、本校の SGH 事業に関わるブログ記事を掲載する毎に、全国「SGH 専用ホームページ」の活動情報、および「SGH 指定校アソシエイト SNS」にも同内容の記事を掲載している。

(3) その他 SGH 事業に関わる本校ホームページの特長

- ① 海外の学校や団体との交流が行われているため、日本語の他に 5 か国語 (英語、フランス語、ドイツ語、韓国語、マレー語) による学校紹介ページを作成している。平成 28 年春に、5 か国語の紹介を見直して更新した。
- ② トップページには、SGH 事業をはじめ、本校の教育活動や行事の案内、成果報告などの最新情報を写真と共に掲載し、本校がその時期に最も伝えたいと考える情報やメッセージの提供の場として活用している。
- ③ 旧ホームページから引き継いでブログ「岡山城東な日々」を開設しており、月平均 10 回程度行事の内容や生徒の様子などの記事を更新し多くの方に閲覧されている。
- ④ WordPress は、操作性の面で Web 初心者も利用しやすく、海外修学研修などの海外から発信する記事に関してもリアルタイムでの作成がより容易になっている。
- ⑤ パソコン (タブレットを含む)、スマートフォンの 2 種類の画面サイズに応じてレイアウトが変わる「レスポンス・デザイン (responsive design)」を採用し、小さい文字表示や一部の画像非表示などの不便さが解消された。両方の画面で使用するアイコンを、明るく前向きな校風を表す、カラフルなボタン風デザインに統一した。

第5節 JLPの取組

1. はじめに

「学類コア科目」と「学類研修」での学びが、課題研究であるGLOBAL II と関連の深い取組であると、SGH全体構想に示されている。本年度より、本校の指導教諭は3人となり、委員会組織「JLP (Joto Learning Project)」のリーダーおよび主要メンバーとして運営に携わっている。各指導教諭の専門は理科（化学）、芸術（音楽）および外国語であり、本校の4つの学類のうち3つを網羅している。本年度は、3名の指導教諭が互いに連携をとり、「学類コア科目」ならびに「学類研修」の底上げを図ったので、それを報告する。

2. 学類コア科目における取組

4つの学類では、それぞれ学類としての専門性を教科横断的に学習するための学校設定科目を持つ。これらの授業で、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を提案する。4つの学類における科目名は、以下の通りである。

- ・人文社会学類……Global Arts
- ・国際教養学類……Global Studies
- ・音楽学類……Global Music
- ・理数学類……Global Science

国際教養、音楽および理数の各学類では、指導教諭を軸として、GLOBAL II を側面から支援する授業やカリキュラムを考案して実践した。いくつかの授業については、学校内外に公開授業として通知し、個人やグループとしての生徒の活動を観察してもらった。人文社会学類においては、従来から開発されている授業を踏襲した。

以下には、理数学類のGlobal Scienceについて、詳細を報告する。

Global Scienceでは理数学類の生徒約160名を4つのグループに分け、物理または生物、化学、数学（日本語）および数学（英語）の4分野について、6時間ずつ学習したら次にローテーションする方式で運営している。このうち、化学の講座では、次のような展開とした。

・1時間目：プレゼンテーションセミナー

まず、幼児や低学年児童向けに刊行されていた「なぜなに絵文庫（ポプラ社）」全50巻から、気に入った本を一冊選ぶ。続いて、記事に関連する3枚のスライド（素案：A4用紙に鉛筆書き）をつくる。スライドの内容は、「〇〇とは」「ここがすごい」「もっと知りたい」である。これを元に、1対1でプレゼンの演習を行う。

この教授法の手本は、以前「日本科学未来館」に勤務していた井上徳之氏によるものである。前任校でSSHの指導をしていたときの経験を反映したものである。

・2時間目：ブレインストーミング

「水溶液の色合いと濃度の関係」というタイトルで、「研究をデザインする能力を育てる」授業を行う。青色色素の濃度が異なるために色合いの異なる水溶液を素材として、複数用意された溶液から任意の2本を選び、一方の濃度が他方の濃度と倍半の関係にあることを確かめる実験について、思いつく限りアイディアを出す。その場で即席に捻出したアイディアについて、1対1、2対2そして4対4のプレゼン合戦を経て、勝ち抜いたアイディアを全員の前で披露するというものである。この手法は、日本の高校生だけでなくマレーシアやガーナなど他国の学生（大学生教養レベル）についても実施し、効果を確認している取組である。

- ・ 3 時間目と 4 時間目および 5 時間目と 6 時間目

3 時間目と 4 時間目は約40人を二分割し、一方は吸光光度法による実験、他方は実験結果（数値データ）を表計算ソフトでグラフに描く演習と、pHを算出するのに表計算の計算機能を利用する演習を体験的に学ぶ。5 時間目と 6 時間目は、対象生徒を入れ替えて同じ授業をしている。スマートフォンやタブレットが普及する前と比べて、生徒がパソコンを操る技能が低下している。プレゼンテーションのスライドに示す表やグラフの作成に役立っている。

続いて、国際教養学類の取組について示す。

- ・ Global Studiesにおける英語ディベートの実践

8 月22日に、岐阜聖徳学園高等学校の宮川純一氏を講師に招き、講習会を行った。その後の授業では、ディベートの演習を繰り返した。成果は、平成31年1月31日から1泊2日で実施したIntensive Training Campで披露され、県内から参加した10名の外国語指導助手から絶賛された。



10月16日～17日には、韓国の交流校である金海外国語高校から生徒49名が来訪し、英語でディスカッションを行った。また、本校生徒は、学校紹介や高校生のトレンドについて英語でプレゼンテーションを行った。

- ・ グローバル教養セミナー講演会

11月2日には、就実大学客員教授のBill EMMOTT氏を講師に招き、2年次生徒を対象に講演会を実施した。就実大学経営学部と連携して7月6日に予定していたGeza Von HABSBURG大公による「ハプスブルグ家とヨーロッパ文化」のセミナーは、西日本豪雨により中止となった。

最後に、音楽学類の取組について示す。

- ・ Global Musicにおける課題研究の実践

日本と近隣アジア諸国の音楽の特徴を調べ、類似点や相違点を比較対照することにより、歴史や文化にまでスポットを当てた研究を行う。まず、アジアの中の日本を知る。そして高大連携大学である「くらしき作陽大学モスクワ音楽院特別演奏コース」特任教授の公開レッスンを受講する。また、海外へ留学中の卒業生を招聘して、日本とヨーロッパの考え方の違いなどを知る。このようにして、日本人のアイデンティティについて深く学ぶ機会を数多く設けることが出来た。

3. 学類研修における取組

4つの学類では、それぞれ海外の連携校を訪問し、国際交流を深めている。学類研修における交流プログラムにおいて、主体的・対話的で深い相互理解を推進するための仕掛けを考

案し、実践している。このことが、GLOBAL IIにおいて生徒が考察や分析を行う時の背景として反映されている。以下に理数学類の研修におけるプログラムについて、詳細を示す。

いわゆる修学旅行として実施している学類研修の選択コースとして「マレーシアコース」が設定されて今年で5年目になる。以下で紹介する交流は、旅行業者依存ではまず実現不可能であり、人脈を駆使した結果可能となったものである。

- ・2014年～2015年の2年間は、京都大学グローバルCOE研究員で、マラヤ大学の博士研究員として勤務していた坂井伸光氏と連携して、水質など環境問題に関するワークショップを開催した。
- ・2016年～2017年の2年間は、マラヤ大学の日本留学特別コース（AAJ）の日本語教育科と連携して、日本留学を目指して学習中のマレーシア人学生とのワークショップを開催した。
- ・2018年は、本校旧職員で今年からマラヤ大学のAAJに勤務している山下高明教諭と連携して、マラヤ大学の植物園を見学し、図書館を訪問するアクティビティーを実現した。本物のジャングルウォークにより、主体的な学びを生徒は体験した。今後も、海外の連携先として、マラヤ大学との関係を維持していきたい。

国際教養学類の学類研修では、次のような取組が見られた。

- ・台湾の桃園治平高校での交流
生徒一人ひとりに桃園治平高校の生徒が付き添い様々な活動ができた。交流をスムーズに行うために、事前に学類コア科目のGlobal Studiesの授業でプレゼンテーションやスピーキングのトレーニングを行った。
- ・銘博大学での英語プログラム
本校生徒が6つのグループに分かれて、大学の先生方によるタイプの異なった3つの授業に参加した。一味違う英語の授業に刺激を受けた。

音楽学類の学類研修では、次のような取組が見られた。

- ・台湾の国立師範大学附属高級中学での交流
相手校の音楽班との音楽交流が実施できた。言葉は無くても音楽で通じ合える喜びを感じるとともに、より深く通じ合うためには、やはり言葉によるコミュニケーションが不可欠である事も痛感した。

4. 成果と課題

「学類コア科目」や「学類研修」での学びが、GLOBAL IIの研究を深化させていることは、上記の例から十分に感じ取ることができる。この様に、指導教諭を軸とした教材開発は着実に果たされている。しかし、JLPの各教科代表には、十分な役割を演じてもらうことができなかった。今年改めて「公開授業は、教員の活動よりも、むしろ生徒の活動を見てもらう」ことが重要であると気づいた。そのため、「外部講師を招聘しての教員向け講習会」の開催に躊躇した。指導教諭による年1回の公開授業は、ノルマとして課せられているので、その場面に連携先の大学や教育機関などから外部講師を招聘し、生徒の活動を踏まえた授業展開を共有し、指導助言を仰ぎ、新たな案を創出できる「場」を作り出すことが、今後JLPに求められている課題である。これにより、本校教員が授業改善に主体的に取り組む契機が生まれると考える。